

たわわハートねっと 代表 青木智美

1. 事業名：グリーンカーテンがつなぐ地域の絆作り事業
2. 事業実施期間：平成 28 年 9 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日
3. 事業の成果と課題

<成果>

この事業は、当団体が別の事業で取り組んでいる「都農ふれあいの居場所」(地域の集いの場)に来たくても交通手段がないなどの理由から居場所に来ることができない高齢者(主に 1 人暮らし)の方や見守りが必要な高齢者のお宅に訪問・傾聴し、孤立を防ぐことを目的に活動している。これまで自主事業であったが、助成を受け今年度は、訪問する側のボランティア(隊員)参加の呼びかけに力を入れた。

活動の様子をブログや週報(回覧版)に入れてもらうだけでなく、「この人に活動に参加してもらいたい。」という人に対して、直接声掛けを行った。「これまで活動を知っていて興味はあったものの、一人で参加するのはちょっと。」と思っている方が、知り合いの人から誘われて活動に参加された方もおられた。歌を歌うのが好きな方がいらしたので、「訪問先の施設でみんなで歌を歌うから参加しませんか。」と誘うとともに喜んで参加された方もおられた。参加を促す際にはその方の興味を引くような具体的な声掛けと、口コミがとても重要であることを再認識した。

また、新たな参加者としては中学生の参加もあった。参加してくれた学生の方に対しては、「ボランティア活動参加証明書」を発行した。平成 28 年 11 月 1 日より居場所が移転したことも新たな活動者を増やすきっかけにもなった。

活動中においては、ちょっとした困りごとも対応することが出来た。例えば、庭の草取りや倉庫の片付け、ドアノブのかぎの油さし、家庭菜園の高い木になっている果物の収穫手伝いなどである。

これらのたすけあいは、隊員自らが傾聴の中で感じ、必要と思ったらそれを行うという、自然な形で行われたことがとてもよかったです。また、自ら行うことで、隊員自身楽しんで取り組めた。ある訪問先で庭の草取りをしてくださった親子の方から「自宅はマンションなので、草取りをするのがとても久しぶりなので、新鮮で、楽しかった。」といった感想を頂いた。

隊員と訪問先との交流だけでなく、隊員同士の交流もあったことも良かった。特に子どもたちにとって中学生が幼稚園の子どものお世話をしたり、それを見ていた大人が中学生を褒めてくれたりと、多世代にわたる交流が自然とできた。

講演会には、33 名の参加があった。居場所の役割について、これからますます進む少子高齢化社会において、私たちはくらしの中でどんなことを意識しながら暮らしていくべきなのか、人とふれあうこと、たすけあいについて、多岐にわたって話があった。講師以外には気仙沼市から 2 人のゲストも来て頂き、震災の復興において現在の課題、災害時だけでなく日常から人とふれあう事、助け合うことの大切さをお話しして頂いた。参加者の方からは、「改めて助け合うことの大切さを感じた。」「行政のサービスだけでは足りない、隙間の部分を住民同士で助け合うことがこれからは必要。」などの感想を多くいただいた。居場所や本事業の活動を通して、今後も人とふれあうこと、困ったときはお互いさままで助け合うことの大切さを感じていけるように来年度も自主事業として継続して活動していきたい。

<課題>

少しづつ隊員が増えたものの、受け入れ先がなかなか増えないことが課題である。「家に来てもらうのが気の毒だ。」「申し訳ない。」という気持ちが強い方が多い。助けてほしいことを「助けて」と言えるには、日頃からの信頼関係作りにもこれまで以上に気を配ること、また以前からの顔見知りの方に活動の参加を直接呼びかけること(「○○さんが困っているみたいなので、お願い」というような声かけ)が必要と感じた。